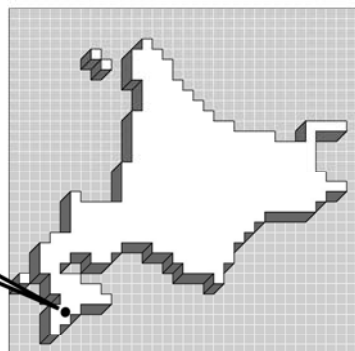


連載 わがマチの自慢 No.6

知内町

— 笑顔かがやく 躍動の舞台 —



わがマチの自慢第六回は、笑顔かがやく躍動の舞台^{まち}をめざす知内町を紹介する。

1. 知内町へ

函館市から国道二二八号を南下し、知内町へ向かう。

旧上磯町市街のはずれ、右手にまるで近未来都市の様なセメント工場が現れる。製品等物資を運ぶシエルターが頭上を通り、海上の埠頭へと続いている。

渡島当別で国道を右に逸れ、高台に上つていくとトラピスト修道院がある。この高台から遠く津軽海峡を望むと、のどかな緑色と水色の絶景が広がり、異国に來たかのような錯覚を覚える。

木古内町に立ち寄ると、突然、大きな灰色の新幹線駅が現われ、来年三月の開業を

待っている。街は騒然とし、再開発で賑わっている。

函館市から通勤圏といえる一時間強で知内町市街に入ると、木古内町の騒然とした空気が落ち着き、北島三郎さんの実家を右にかすめ見、やがて知内町 道の駅に辿り着く。隣接した海峡線の知内駅は廃止となったが、この先、鉄路は青函トンネルへと入っていく。福山街道（国道二二八号）は海岸線をさらに福島町、松前町、上ノ国町、江差町へと続く。

知内町市街に戻り、山の方向に向かう。重内神社の裏手に二一〇段の階段を登ると、重内展望台があり、大パノラマが展開する。眼下に水田やビニールハウスが広がり、遠く火力発電所の煙突が聳え立ち、右手及び後方に大千軒岳などの山々が広がる。前方には津



重内展望台より知内町市街、津軽海峡を望む



青函トンネル出入口

軽海峡が横たわっており、知内かきや知内マコガレイを連想してしまうのはいやしさのあらわれだろうか？ ここからの眺めは人間の営みを感じられ、トラピスト修道院からの眺望と対照をなし、なぜかホツとする。

海沿いの道に出ると、北海道電力火力発電所を右に見る。左手には、上磯のセメント工場のように埠頭へ海上に岸壁が延びている。この先は小谷石、絶景、秘境の矢越岬へと続く。

知内町には、鎌倉時代に和人が砂金掘りに移住してきたとの記録、北海道最古の温泉知内温泉があり、北海道の歴史の順路は知内に始まる。

知内町は紹介しきれない程にいろいろな顔を持っている。と、いうことはいろいろな特色を發展させて行くことがで

きる、魅力あふれる町である。

2. 成功モデルとして評価されるニラの産地形成

知内町の産業は農業（平成二三年販売額一、七三五百万円）、漁業（同販売額六四五百万円）に代表され、農業の品目においては、水稲三一四百万円、ニラ一、〇一六百万円となっており、ニラは今や農産物全販売額の六割強、水稲の三倍強を占めている。

ニラの生産は昭和四六年の試験栽培に遡る。それまで主体であった水稲の減反等、専業農家も出稼ぎに出なければ生活できない状況に将来を夢見る青年同志が集まり、自立経営農家を目指し、稲作経営に有利な補完作物導入の検討を昭和四五年に始めた。とこ

ろが群馬県に於いて青年層が中心になって、ニラ栽培に成功した事例を農業雑誌「地上」で知り、普及所、農協の指導助言を受け九名で重内ニラ栽培研究会を発足させたのである。試験栽培は六九aに「大葉」をビニルトンネルで二年間株養成を行ったが、発芽はタネバエ等の被害を受け三〇〜五〇%の苗立で、欠株は補植したが収穫可能面積は四五aだった。

研究会は、ニラ栽培の研究・視察を重ね、オイルシヨツクによる資材の高騰、風害によるビニールハウスの破損などの紆余曲折を経て、昭和五〇年に発展的に知内町ニラ生産組合に名称変更した。昭和六三年には第一七回日本農業賞（銀賞）受賞、平成一七年第十一回ホクレン夢大賞「農業者部門」大賞を受賞し、平



集出荷施設



ニラの収穫

成二二年には遂に販売額一〇億円に到達した。その間、平成一〇年にフィルム包装や梱包を自動化するニラ包装システムを導入した野菜集出荷施設の完成、品種を「パワフルグリーンベルト」(商品名知内ニラ「北の華」)に統一、食品の安全に万全を期すべく、平成一六年の結束テープへの生産者番号明記を皮切りに、出荷日・包装日の産地認識番号の印字、ハウス台帳の完備と出荷ほ場の番号管理によるほ場特定、生産者名の記載、QRコードによる生産者情報の紹介など、先進のトレーサビリティシステムを確立している。また、平成二〇年から全組合員を対象にGAP(農業生産工程管理手法)を導入し、消費者に安心される野菜づくりに取り組んできた。無の状態から、「道内一の

ニラ生産地という目標を現実のものにすることができたことは、ひとえに生産者一人ひとりの真摯な努力・連帯はもちろん、町あげての応援・協力があつたからこそ感謝しています。ここに至るまでの道のりは苦難の連続でしたが、品種の選定や、栽培方法の工夫など、粘り強い研究の継続が実を結んだものと思えます。」(知内町ニラ生産組合組合長)

平成二六年時点において、栽培農家数七一戸、うち木古内町の農家二戸も生産組合に加入しており、作付面積二八・一ha、生産量一、五三六・二tをあげている。今後の知内ニラの課題は、通年出荷と無結束の集荷体制の確立とのことで、より一層の発展が期待される。(以上、町勢要覧二〇一二及び産業振興課資料より)

3. 町の新たな施策

知内町の森林面積は町域の約八割、一五、八八九haを占め、人工林面積六、三〇九haの内、約五割をスギ(道南スギ)が占め、主産材となっている。しかし、知内町で製材されたスギ材の殆どは他地域へ流通されるばかりで、地域の材を地域で使う「地材地消」を推進し、雇用創出や林産業等の地域振興に繋げることが課題となっていた。

そこで、地域材の積極的利用を掲げた知内町地域材利用推進方針を平成二四年度に策定し、地元の森林・林産業団体や研究機関と連携しながら、以下の施策を推進している。

① 地域材による公共施設の建設を推進

平成二四年度に地域材使用率九三%の教員住宅二棟、二六年度は第一町民プール・子ども交流センター複合施設「遊泳館」、地域活性化施設「矢越山荘」を建設。これら施設建設には町有林のスギ原木が約一、〇〇〇m³使用され、施設利用者は目で見て触れて地域材の良さを体感しているという。

② 地域材住宅への助成制度を導入

地域材を使用して住宅や車庫等を建築した建主に最大二〇〇万円の助成を二五年度からスタート。当初は、多少でも地域材利用へ向けたインセンティブが働けばとの思いであつたが、予算額を二・三倍に補正するほどの反響があつ



ボイラー施設



遊泳館

料から森林資源を活用した木質バイオマスエネルギーに転

③ 木質バイオマスエネルギーの導入

たこのこと。成功のカギとなったのは、地元の林産業者や建築事業者が品質向上や使いやすさを常に意識し努力したためとのことである。

換するため、「チップボイラー施設」と「木質資源貯蔵施設」を建設した。地域資源を有効活用した木質バイオマスエネルギーは、地域林業の再生や雇用の創出などの地域内経済効果をもたらすほか、温室効果ガスの削減にも貢献するのである。



矢越山荘



スギ林



チップ工場

知内町は現在「第五次知内町まちづくり総合計画」（平成一八年度～二七年度）の計画期間中である。その重点目標は、①魅力あるまち「しりうち」、②心豊かなまち「しりうち」、③AAA安全・安

4. 笑顔かがやく躍動の舞台へ

心・安定の産業のまち「しりうち」、④自主・自立のまち「しりうち」を骨子としている。そして第四次総合計画か



カキ VS ニラ祭りの賑わい

ら、『笑顔かがやく躍動の舞台』というイメージテーマを引き続き掲げている。その裏には、①少子・高齢化、②地

球温暖化、酸性雨などの環境問題に対する意識が浸透し、自然志向の高まり、③経済面で国際間の競争が激化し、規制緩和などの開かれたシステムへの転換を海外から迫られていること、④高度情報化社会の到来、⑤高速交通や情報システムが多様にネットワーク化され、国内外の時間距離や立地条件が大きく変化しており、人や物・情報などの動きの活発化や変化に対応した交流型社会への転換が求められていること、⑥行政資源（財源と人的資源）の制約が厳しくなってくる中、住民と行政の協働を進め、地域の行政を自主的・自立的に運営していくことが求められていること、という認識が根拠として挙げられている。時代の潮流の大きな変化に対応していくことが豊かな地域社会の形

成とまちづくりには不可欠だということである。

単に産業振興方策を列挙し、かつての町の規模を復活させようという従来型の考え方、方策では町の再生・将来はなく、八〇〇年の歴史をとぎらせないために、ニラの産地形成、スギ材の地材地消のように着実に歩みを進めることで、知内町は堅実に新たなまちづくりをすすめているのである。

〈取材後記〉

遊泳館の前を歩いていると、ヘルメットをかぶり、自転車に乗った小学生低学年の男子生徒に「こんにちは」と、元気よく大きな声をかけられた。町の雰囲気、営みが伝わってくるような印象的な出会いだった。

一般社団法人 北海道地域農業研究所

特別研究員 西野義隆